

解答

②・④・⑥

解答解説

① 不正解

選択肢の和訳

デジタル技術がほぼすべての音楽的作業を自動的に行えるため、伝統的な楽器の訓練や楽譜は、まもなく不要になると本文は予測している。

本文の対応箇所

第1段落

The future of music education will probably involve not the abandonment of traditional training, but its combination with new forms of creativity, technology, and collaboration.

「音楽教育の将来は、伝統的な訓練を放棄することではなく、それを新しい形の創造性、技術、協働と組み合わせるものになるだろう。」

第2段落

This does not make musical skill unnecessary, but it changes the forms that skill can take.

「これは音楽的スキルを不要にするのではなく、スキルが取りうる形を変えるのである。」

解説

本文は、伝統的な訓練や音楽スキルが不要になるとは述べていない。従来の学習を、デジタル技術や新しい創造活動と組み合わせるべきだとしている。したがって不一致。

② 正解

選択肢の和訳

デジタルツールによって音楽制作に取り組みやすくなる可能性があるが、生徒は自動機能に何も考えず依存するのではなく、その背後にある音楽上の判断を理解すべきである。

本文の対応箇所

第2段落

These tools may lower practical barriers for students who cannot afford private lessons or costly instruments.

「これらのツールは、個人レッスンや高価な楽器を購入できない生徒にとって、実際上の障壁を低くする可能性がある。」

第3段落

If students use these features without understanding the musical decisions behind them, they may produce polished results while learning very little.

「生徒がその背後にある音楽上の判断を理解せずに、こうした機能を使えば、ほとんど学んでいないにもかかわらず、完成度の高い作品を作る可能性がある。」

解説

選択肢の make musical creation more accessible は、本文の lower practical barriers に対応している。また、自動機能を使う際には、その背後にある音楽上の判断を理解する必要があるという内容も一致する。

③ 不正解

選択肢の和訳

筆者は、どのような音楽的伝統を学ぶ場合でも、音楽的リテラシーを標準的な楽譜を正確に読み書きする能力だけであると定義している。

本文の対応箇所

第4段落

The meaning of musical literacy may also need to expand.

「音楽的リテラシーの意味も広げる必要があるかもしれない。」

A broader approach would recognize that analyzing recordings, creating variations, performing by ear, and responding to

WPM Over 150 を目指す

other musicians are also significant musical abilities.

「より広い考え方では、録音を分析すること、変奏を作ること、耳で聞いて演奏すること、他の演奏者に反応することも、重要な音楽的能力だと認められるだろう。」

解説

本文は、楽譜の読み書きだけを音楽的リテラシーとする考えを広げるべきだとしている。したがって、exclusively「～だけ」とする選択肢は本文と反対である。

④ 正解

選択肢の和訳

音楽的能力をより広く捉えるなら、即興演奏、耳で聞いて演奏すること、録音を研究すること、他の演奏者に反応することも含まれる可能性がある。

本文の対応箇所

第 4 段落

Yet many musical traditions depend primarily on imitation, memory, improvisation, or oral transmission.

「しかし、多くの音楽的伝統は、主として模倣、記憶、即興、口頭による伝承に依存している。」

A broader approach would recognize that analyzing recordings, creating variations, performing by ear, and responding to other musicians are also significant musical abilities.

「より広い考え方では、録音を分析すること、変奏を作ること、耳で聞いて演奏すること、他の演奏者に反応することも重要な音楽的能力だと認められるだろう。」

解説

選択肢の improvising, performing by ear, studying recordings, and responding to other performers は、本文の表現と直接対応している。したがって本文と一致する。

⑤ 不正解

選択肢の和訳

教師が音楽の歴史的背景や本来の社会的意味についてほとんど説明しない場合でも、さまざまな文化の音楽を取り入れることは常に効果的である。

本文の対応箇所

第 5 段落

Nevertheless, inclusion should not mean presenting every tradition in a superficial way.

「しかし、さまざまな音楽を取り入れることは、すべての伝統を表面的に紹介することを意味すべきではない。」

Teachers need sufficient understanding of the historical and cultural contexts in which music developed.

「教師には、音楽が発達した歴史的・文化的背景について十分な理解が必要である。」

解説

本文では、文化的背景を理解せずに表面的に音楽を扱うことを批判している。したがって、背景説明が不十分でも always effective「常に効果的」とする選択肢は誤りである。

⑥ 正解

選択肢の和訳

オンラインでの協働は異なる場所の生徒を結び付けることができるが、同じ場所で一緒に演奏するときに必要な微妙な調整を完全に再現することはできない。

本文の対応箇所

第 6 段落

Online platforms allow students in different regions or countries to create performances together.

「オンラインのプラットフォームによって、異なる地域や国の生徒と一緒に演奏をすることができる。」

WPM Over 150 を目指す

At the same time, remote collaboration cannot completely replace the experience of making music in the same physical space.

「同時に、遠隔での協働は、同じ物理的空間で音楽を演奏する経験に完全に代わることはできない。」

These subtle interactions are difficult to reproduce through a screen.

「こうした微妙な相互作用を画面越しに再現することは難しい。」

解説

オンラインで異なる地域の生徒が協働できる一方、呼吸、タイミング、音量、動きなどの微妙な調整は完全には再現できないと述べられている。したがって本文と一致する。

⑦ 不正解

選択肢の和訳

音楽教育は価値ある文化表現としてではなく、主として試験成績や精神的健康を向上させる方法として正当化されるべきである。

本文の対応箇所

第 7 段落

However, music classes should not be justified only by claiming that they improve test scores or produce emotional benefits.

「しかし、音楽の授業は、試験の成績を上げたり、感情面での利益を生み出したりするという理由だけで正当化されるべきではない。」

Music is worth studying because it is a complex form of human thought and cultural expression, not merely because it may improve performance in other subjects.

「音楽を学ぶ価値があるのは、それが人間の思考と文化表現の複雑な形だからであり、単に他教科の成績を向上させる可能性があるからではない。」

解説

本文では、音楽教育は試験成績や感情面への効果だけで正当化すべきではないと述べられている。音楽自体が人間の思考と文化表現として価値を持つため、選択肢は本文と反対である。

⑧ 不正解

選択肢の和訳

筆者は、最も効果的な未来の音楽教育では、従来の方法を廃止し、すべての生徒が使用する一つの標準化されたデジタル方式に置き換えるべきだと結論づけている。

本文の対応箇所

第 8 段落

The future of music education should therefore balance continuity with change.

「したがって、音楽教育の将来は、継続と変化のバランスを取るべきである。」

Traditional technique, digital creativity, cultural diversity, and collaborative experience need not compete with one another.

「伝統的な技能、デジタルによる創造性、文化的多様性、協働の経験は、互いに競い合う必要はない。」

Music education will remain meaningful not by preserving one fixed method, but by giving new generations the skills to participate critically and creatively in an evolving musical world.

「音楽教育が意義を保ち続けるのは、一つの固定された方法を守ることによってではなく、変化し続ける音楽世界に批判的かつ創造的に参加する技能を、新しい世代に与えることによってである。」

解説

本文は、伝統的な方法をすべて廃止することも、一つのデジタル方式に統一することも主張していな

WPM Over 150 を目指す

い。伝統と変化、多様な方法をバランスよく組み合わせることが重要だとしているため不一致。

全訳

音楽教育の将来

何世代にもわたり、音楽教育は、楽譜の読み方を学び、楽器を練習し、すでに定評のある作品を正確に演奏することを中心としてきた。このような活動には、集中力、身体各部の協調、自制心、音楽構造への理解を養うという価値が今なおある。しかし、急速な技術的・社会的変化によって、教育者は、生徒が何を学ぶべきか、音楽をどのように教えるべきかを再検討せざるを得なくなっている。音楽教育の将来は、伝統的な訓練を放棄することではなく、それを新たな形の創造性、技術、協働と組み合わせるものになるだろう。

重要な変化の一つは、デジタルツールがますます利用しやすくなっていることである。現在、生徒はソフトウェアを使って作曲し、安価な機器で演奏を録音し、かつてなら専門的なスタジオを利用しなければ扱えなかった音を試すことができる。こうしたツールは、個人レッスンや高価な楽器を購入できない生徒にとって、実際上の障壁を低くする可能性がある。コンピュータやタブレットを持つ学習者は、使用されているすべての楽器を習得していなくても、複雑な編曲を作ることができる。これは音楽的技能を不要にするのではなく、技能が取りうる形を変えるのである。技術によって、生徒が注意深く音を聴く力や演奏技術を身につけず、自動機能に依存するようになるのではないかと心配する教師もいる。ソフトウェアは音程を修正し、リズムを生成し、和音の型を提案することができる。生徒がその背後にある音楽上の判断を理解せずに、こうした機能を使用すれば、ほとんど学んでいないにもかかわらず、完成度の高い作品を作るかもしれない。したがって、デジタルツールが最も効果を発揮するのは、知識の代用品ではなく、探究のための楽器として扱われるときである。生徒には、

単にある音を素早く作る方法だけでなく、なぜその音が効果的なのかを問うことが求められる。

音楽的リテラシーの意味も、広げる必要があるかもしれない。伝統的に、リテラシーとは、標準的な楽譜を読み書きする能力を指すことが多かった。しかし、多くの音楽的伝統は、主として模倣、記憶、即興、口頭による伝承に依存している。ポピュラー音楽、ジャズ、民族音楽、非西洋の音楽的伝統には、印刷された楽譜では十分に表現できない知識の形が必要となる場合がある。音楽的能力をより広く捉えるなら、録音を分析すること、変奏を作ること、耳で聞いて演奏すること、他の演奏者に反応することも重要な能力だと認められるだろう。

このような広い考え方によって、音楽教育はより多くの生徒を受け入れるものになる可能性がある。生徒が学ぶ音楽と、家庭や地域社会で耳にする音楽とが無関係に思えると、生徒は関心を失うことがある。より幅広い音楽的伝統を取り入れれば、生徒は自身自身の経験を正当な知識の源として捉えられるようになるかもしれない。しかし、さまざまな音楽を取り入れることは、すべての伝統を表面的に紹介することを意味すべきではない。教師には、その音楽が発達した歴史的・文化的背景について十分な理解が必要である。そうでなければ、多様性は、その音楽が本来持っていた意味から切り離された、魅力的な音の寄せ集めにすぎなくなってしまう可能性がある。協働も、ますます重要になると考えられる。オンラインのプラットフォームによって、異なる地域や国の生徒と一緒に演奏を作ることができる。このような計画は、学習者をなじみのない音楽様式に触れさせ、異なる背景を持つ人々と芸術上の判断について話し合うよう促すことができる。同時に、遠隔での協働は、同じ物理的空間で音楽を作る経験に完全に代わることはできない。一緒に歌ったり演奏したりするには、呼吸、タイミング、音量、動きに即座に合わせる必要がある。こうした微妙な相互作用を、画面越しに再現することは難しい。

WPM Over 150 を目指す

音楽教育は、生徒の感情面・社会面の成長において、より大きな役割を果たすようになる可能性もある。集団での演奏によって、忍耐、責任感、注意深く聞く姿勢を学ぶことができる。作曲は、生徒が通常の言葉では説明しにくい経験を表現する方法にもなりうる。しかし、音楽の授業は、試験の成績を上げたり、感情面での利益をもたらしたりするという理由だけで正当化されるべきではない。音楽を学ぶ価値があるのは、それが人間の思考と文化表現の複雑な形だからであり、単に他教科の成績を向上させる可能性があるからではない。

したがって、音楽教育の将来は、継続と変化のバランスを取るべきである。伝統的な技能、デジタルによる創造性、文化的多様性、協働の経験は、互いに競い合う必要はない。考え抜かれた方法で教えられれば、それぞれが他の要素を強めることができる。中心的な目標は、生徒が演奏し、創作し、解釈し、問いを立てることのできる、主体的な音楽的思考者になるよう支援することである。音楽教育が意義を保ち続けるのは、一つの固定された方法を守ることによってではなく、変化し続ける音楽世界に批判的かつ創造的に参加する技能を、新しい世代に与えることによってなのである。